

報告

2012年2月22日の午後5時より法文一号館115教室において、「学際性をどうするか」というテーマで、本郷、駒場の人文学系4学科（英文、表象文化論、美学、現代文芸論）の博士後期課程、PDの研究者が集まり、第一回の小会を行った。研究者であれば専門に関わらず誰でも直面する議題であったこともあり、会場には大学院生を中心に多くの方が訪れ、日ごろの研究で直面する課題について様々な立場から発言を頂いた。シンポジウムは二部構成であった。第一部では登壇者が人文学の学際性にはどのようなものがありうるのかそれぞれの専門分野や研究者としての経験から話をした。休憩を挟んでの第二部は、学際性を可能にする研究・教育環境についての話し合いで、学科や学会の制度の問題について討論を行った。第一部、第二部ともに発表者に一人5分ずつの時間を割り当て、それについてのディスカッションをはさみながら進行するという形式を取ったため、フロアとのインタラクティブな議論を行うことが出来た。議論は大いに盛り上がり、閉会は8時過ぎとなった。なお、当初発表を依頼していた富山由紀子氏は体調不良のために欠席することになり、開催一週間ほど前に富山氏と同じ表象文化論の星野太氏に登壇をお願いして引き受けて頂いたため、4学科間での討論が実現する運びとなった。

第一部において、高村（報告者）は「比較文学」における学際性について、各国文学研究の成立を自明のものとしてそれに対して各項間の関係性を問うアプローチと、各国文学の枠組み自体を問うたり、学科の分割とは別種の文学の普遍性へと向かうアプローチの二つの方向性があるのではないかと論じた。星野氏は、「歴史」と「文学」のような人文科学の枠内の学問領域を横断するソフトな学際性と、文系と理系の領域を超えたハードな学際性の区別について論じた。これら前二者が学際性の原理についての考察を行ったのに対し、調氏と亀田氏はより自らの研究から出発し、学際的な研究の実践について経験的に論じた。写真芸術を専門とする調氏は、現在行っている20世紀前半のアメリカ文化についての研究のテーマを紹介しながら、写真研究がいかに関他のジャンルを巻き込んでいくかを文学テキスト、歴史的テキストなどを参照しながら示した。最後に、亀田氏は旧ユーゴ諸国という自分の研究対象のマイナーさから、不可避免的に学際的な知識を持つ研究者たることを期待されると述べ、研究対象と学際性の関係性を示した。

学際性と制度の問題を話し合う後半の第二部では、登壇者がそれぞれの所属学科やディシプリンの特徴を述べながら、こういった環境が学際的な取り組みを促進するかを討論した。主な論点としては、学際性の基礎となる幅広い教養教育の重要性、研究者としての「帰属意識」の問題、さまざまな研究ユニットの閉鎖性の問題、研究発表の機会の多様性の欠如の問題などがあった。フロアの側からも、登壇者の領域を補充するように、様々な学科の研究の特徴や慣習についての意見が出され、非常に活発かつ有意義な議論を行うことができた。第一部と第二部の終わりには、教員を代表して中村雄祐先生、塚本昌則先生からのコメントを頂き、共著論文や共同研究の形を取った学際性の可能性など、様々な有益なご指摘を頂いた。ここに記して感謝を申し上げたい。

学際性についての問いに絶対不変の解答はありえない。しかし、現在の状況において自己の研究をどのように開き、他の領域と結んでいくかを他の研究者と話し合うことは、きわめて具体的かつ実践的な意味で有益であると言える。したがって、このような試みは時や場所を変えて継続していかなければならない。博約文社という機関の根本的な動機である「学際性」を問う今回の集まりが、未来に向けた知の交流の手助けとなったことを願って止まない。（高村峰生）